

被災地における子供のための活動拠点の研究

～震災後につくられた児童施設の研究と閉上地区のデザイン提案～

A2201436 三浦 望

研究の背景 (概要)

東日本大震災において被害を受けた地元宮城県名取市閉上地区は、江戸時代以来長く仙台近郊の漁場として市民の台所を支えてきた。また、津波被害により、閉上地区では 750 名の犠牲者を出し、未だに 41 名が行方不明となっている。名取市復興支援協会では、小中一貫校の再生は計画されているものの、子供たちの支援といった計画は進められておらず、子供たちが閉上地区でこころのサポートを受けることはあまり期待できない。一方、Save the children Japan が運営する子供のための施設は、石巻市等に建設されており、震災後子供たちの心のケアをしている事例がある。本研究では、事例調査を通して、子供たちやそこで生活する人々の希望を調査し、どういったものが必要なかを考え、子供たちが安心して過ごすことができる児童施設・防災を意識した空間の提案を研究する。

研究の目的・内容

本研究では、震災後つくられた子供センターなどを調査し、どのように運用されているかヒアリングする。それを参考に、閉上地区の子供のための活動拠点のデザイン提案を行い、施設と周りの環境を投影させた全体模型の制作を行う。他に、名取市教育委員会で予定されている、学校の敷地内に防災センター・震災資料図書館を建設することを受け、それをデザイン提案にも盛り込み、最終的には、名取市や閉上地区の方々、今後の子供センターの計画や街づくりの形成のための参考にしてもらうことを目的とする。

研究のプロセス



■ 現地調査

計 5 回の訪問をし、調査を行った。現在の閉上地区は、復興計画図によるかさ上げ工事が進んでいる。2015 年 9 月に災害公営住宅の募集が始まり、12 月末に公営住宅 (戸建て) の建設工事が始まった。復興計画は現在のところ具体的になっておらず、大まかなエリアを分けた程度で土地利用計画までしか進んでいない。また、12 月に震災当時津波に飲まれた閉上中学校の校舎解体が始まった。この計画では地域のコミュニティ形成や子どもが安心して遊ぶことができることは期待できないことが視察でもわかった。



▲閉上地区復興計画図

■ 事例・ヒアリング調査

★児童施設

- ①いわき市中央台東児童クラブ ②南相馬八沢児童クラブ ③石巻中里児童クラブ
- ④名取市増田児童センター ⑤名取市文化機関多目的ホール “希望の家”



《《施設の方の声》》

- ・ 実際は家を失い、仮設住宅や災害公営住宅で過ごしている子供たちが利用しているとは限らない。
- ・ 学童規約で収容人数は決まっているものの、入れない子供たちがいる状況で、スタッフの人数も少ない。
- ・ 子供たちは、勉強スペース・遊びスペースを区切っていなくても空間の住み分けをしている。
- ・ 震災後は、子供たちから “原発” “津波” といったワードを口にするようになった。地震が来ると怯えてしまう子供も多い。



主にセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが運営・寄付した施設を訪問。子どもセンターは地域との「関わり・つながり」が必要だと感じた。



★閑上地区の方々

- ①施設“閑上の記憶”のスタッフ・運営 NPO 法人のスタッフの方々
- ②閑上地区に自宅があった住民の方々

[震災後の子供たちの様子]

- ・落ち着きがなくなり、言葉遣いが乱暴になった。
- ・自宅跡地に行けない子供が大半で、水に対する恐怖心がある。
- ・震災後に地元を離れた子供たちが新しい学校に行って不安定になった。

[子供たちをサポートする場所について]

- ・必要だと思う。カウンセラーの力だけでなく、子供たち同士で思いを共有する場所が閑上地区にはないため、つくってほしい。
- ・子供たちが話したいときに集まって話せる場所は必要。
- ・小学生だけでなく、中高生も集まることができる環境が欲しい。



デザイン提案

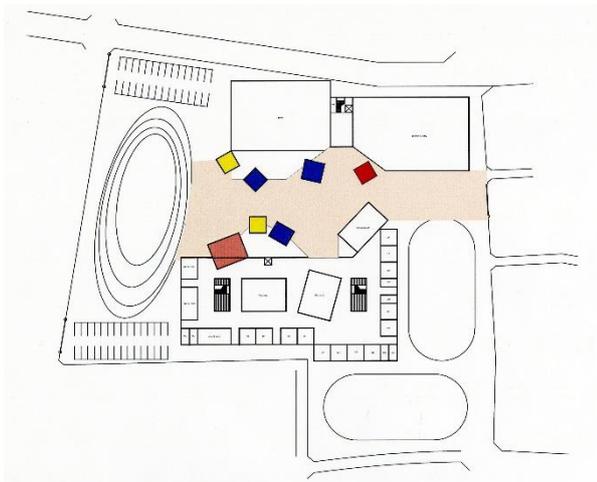


- ・避難しやすい環境
- ・人が集まりやすい環境
- ・防災・について学べる環境
- ・避難路の整備 など



閑上地区における
子供たちの活動拠点

■デザイン提案



■成果物



▲閑上地区復興計画敷地模型 (1/1000)



▲閑上小中学校デザイン模型 (1/200)

避難路の整備とコミュニティ形成を考え、まちと学校施設が“つながる”デザインを考えた。普段、避難路は閑上地区の人達が震災資料図書館やプールを利用する際に訪れる自由街路として地域のみんなが集まることが出来るようにし、避難路は、丘の上に逃げられるように道を明確に表すように心がけた。また、学校と施設はある一定のところで空間を分けて、生徒は快適に勉強出来、防犯面でも安心できるようにデザインした。

考察

震災から約5年。この閑上地区の復興計画は時間や財政面等の様々な理由で、地域に住む子供たちやその家族の意見が十分に反映されないままに計画が進められているように感じた。復興後、行政の計画では閑上地区を故郷として生活してきた人たちの安全面は守られるが、わかりやすい避難誘導、地域のコミュニティ形成は考えられていないように感じ、それらを考えた上でまちづくりを行うべきだと考えた。私は、今回の研究で、震災の爪あとが残る閑上地区に出来る限り足を運んだ。また、事例調査で見た震災後の子供たちの様子を踏まえてデザイン提案できるよう、努めた。閑上地区ではかさ上げ工事が着々と進み、現在も行政・市民部会等で、まちづくりの内容について話し合われているが、行政・住民の人たちにはぜひ子供たちが安心して暮らすことのできるまちづくりを考えて欲しいと思う。